

□「三間」(空間、時間、仲間)の喪失

高度経済成長の真つ只中、1965年を境にして、子どもの「室内あそび」と「戸外あそび」の時間が逆転しました。

都市部で、それ以前のような雑木林、里山、原っぱ、路地裏、空き地も消え、時代と共に子どもたちは、塾やお稽古事がスタンダードとなつていきました。

遊ぶ時間が減れば減るほど、友達同士で遊ぶ曜日や時間帯を合わせる事が難しくなります。

1950年代までは、「ガキ大将」を筆頭とする異年齢集団の中で子どもは遊び、上の子が下の子の面倒を見るといふ人間関係を経験することができていました。

しかし、現在の生活環境の中では、人間関係を育む「友人」や「仲間」を無くし、生きる上で大切な「人間形成力」を創造出来なくなっているのではないかと危惧されます。

□子どもたちが、自分の責任で遊ぶ  
プレーパークづくりは、自分たちのアイデアとスタイルで楽しみ、発見や創造する喜びを味わ

える、子どもたちの自由な遊びの世界を、住民たちで取り戻そうという運動です。

□冒険遊び場づくり

そもそもは、わが子の遊び環境に疑問を持った世田谷区の両親の思いがきっかけとなり、1979年、世田谷区の国際児童年記念事業として「羽根木プレーパーク」ができました。区と住民との

協働による事業の先進例として全国的に注目されています。

プレーパークは冒険遊び場とも呼ばれていて、子どもたちが、「やってみよう」という気持ちになる場づくりを、どこまでできるかが鍵になります。

□鶴ヶ島での取り組み

地域支え合いの活動の中から芽吹いている「鶴ヶ島版プレーパーク」。豊かな遊び環境は地域社会の価値とい

えます。そして、多くの子どもたちが、自分の責任で自由に遊び、育つていくことを支えるコミュニティでもあります。

支え合いの地域づくりそのものが、昔の顔の見える関係の再構築。それと同じ様に、幅広い世代が集い、つながり、遊んで育つ楽しさを共有できることを願い、「つるがしま遊び場づくり連絡会」

がつくられました。

第二小の校庭、学童保育室の庭、藤金市民の森等で開催されています。

子どもを中心とするさまざまな広がりが見られる活動であり、地域社会における必要性も高まっています。



市民ネットワーク鶴ヶ島事務所

場所 くらぶメゾン鶴ヶ島  
(鶴ヶ島市富士見2-12-15)

